

循環型社会とコベネフィット CDM への挑戦

福岡方式

準好気性埋立構造とは？

環境シンボルキャラクター
「エコッパ」



福岡市の頭文字「F」の形をした手をかざし、環境を守ろうと「葉っぱ」が地球を見渡しています。

コベネフィット(相乗便益)CDMへの挑戦とは、温室効果ガスの削減と同時に水質汚濁、大気汚染、廃棄物の環境問題の解決を目指した事業。

表紙デザインの意図

「福岡方式」は環境に配慮した埋立方式ということで、「空・地・緑」を具体的に見せて「地球にやさしい」イメージとしました。また、埋立後は緑地や運動場などに活用もできることから、植物が芽吹く写真で「福岡方式」が安全でクリーンな方式であることを印象づけています。

■監修／福岡大学

発行 平成25年3月
福岡市環境局施設課
TEL092 (711) 4312

再生紙を使用しております。

福岡市環境局





準好気性埋立構造を採用している福岡市の中田埋立場(2013年)

埋立範囲
(福岡市消防局 提供)

世界規模で注目される 福岡方式(準好気性埋立構造)

I. 準好気性埋立構造＝福岡方式とは

①開発経緯・福岡市と福岡大学の協力

準好気性埋立構造は、花嶋正孝現福岡大学名誉教授が、福岡市の協力を得て実施した実験結果などを踏まえ、研究開発した技術です。

福岡市は、生ごみ主体の埋立場からの汚濁水や臭気などの問題を抱えていましたので、昭和40年代後半から福岡大学と共同で、浸出水の浄化を目的に埋立地改善の実験を始めました。

昭和48年から3年間にわたって福岡市と共同で実施した久山埋立場の大規模実験の結果を踏まえ、準好気性埋立構造の基本概念が花嶋正孝現福岡大学名誉教授により提案され、昭和50年に建設した新蒲田埋立場で実用化に成功しました。この方式は、日本各地の埋立場で採用され、昭和54年に制定された旧厚生省(現環境省)の最終処分場指針で日本の標準構造として採用されました。

その後、準好気性埋立構造は「福岡方式」と称され、福岡市は福岡大学と共同でアジア太平洋地域を中心に、研修生の受け入れや海外へ技術者を派遣し、埋立場の改善など国際環境協力を行っています。

平成23年7月には、準好気性埋立構造「福岡方式」による既存埋立場の改善が国連気候変動枠組条約で規定するクリーン開発メカニズム(CDM)の新たな手法として、認定されました。



日本における最初の準好気性埋立場(新蒲田埋立場)(1975年)



福岡大学における埋立模型槽による実験
(1974年)



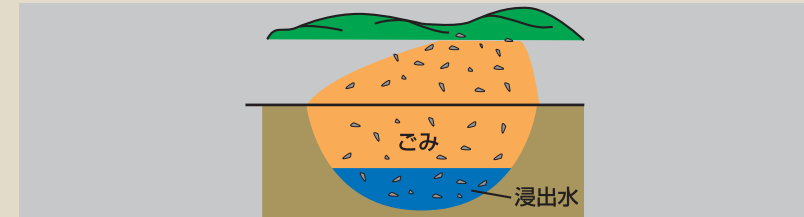
久山埋立場における現場実験(1974年)
〈左側…好気性埋立、右側…準好気性埋立〉

②埋立構造の分類

埋立構造による分類とは、埋立廃棄物層内の微生物環境に着目して埋立地を5分類(※)したものです。埋立廃棄物層内が好気的であるほど、浸出水中の汚濁成分濃度は早期に低下し、同時にメタンや硫化水素などのガスの発生量も低下し、埋立地が早期に安定化することが明らかとなっています。

図-1 埋立構造の分類(5分類のうち主要な3分類を示す)

嫌気性埋立

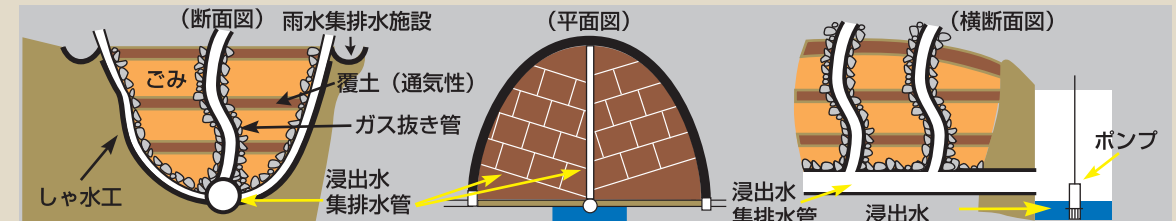


平地を掘削し、あるいは谷部に廃棄物を投棄したもので、廃棄物は水びたしの状態であり、かつ嫌気的です。

※埋立構造の5分類とは

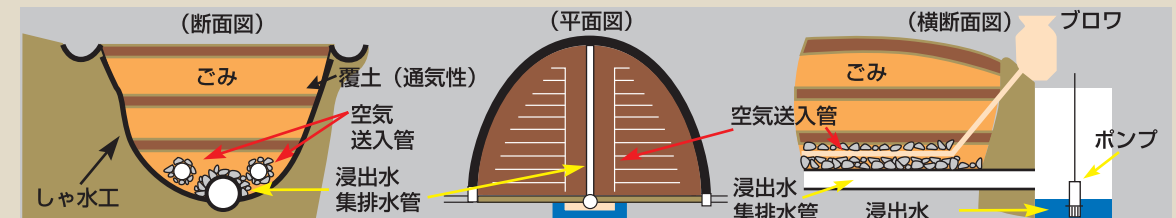
1. 嫌気性埋立
2. 嫌氣的衛生埋立
3. 改良型嫌氣的衛生埋立
(改良型衛生埋立)
4. 準好気性埋立
5. 好気性埋立

準好気性埋立



浸出水集排水管(集排水管)に十分な大きさの断面を持たせ、その開口部は大気に接しており、かつ集排水管の廻りを栗石等で巻いた構造です。ごみ層内部の含水率は小さく、集排水管よりごみ層内部に空気が自然に供給され好気性の状態となります。

好気性埋立



準好気性埋立の集排水管のほかに空気送入管を設け、これを通じて強制的に空気を送入し、ごみ層内部をさらに好気的状态にした構造です。

※浸出水集排水管(集排水管)の効果

集排水管の効果を要約すると以下のとおりです。

- (A) 浸出水の排水が促進されるため、廃棄物層内に浸出水が滞水しなくなり、空気が入りやすくなることから、好気的な領域が拡大します。
- (B) 好氣的領域が拡大し、好気性微生物の働きが活発となり、廃棄物の分解が促進されます。
- (C) 栗石と有孔管の併用により、有孔管の強度を補完すると同時に、空気の拡散を効果的にするため、浸出水の水質が改善されます。
- (D) 埋立底部より50cmの高さに敷設された浸出水集排水管と直径5～15cmの栗石を組み合わせることにより、集排水管の目詰まりが少なくなります。
- (E) 浸出水の排水が迅速であるため、浸出水の滞水による水圧が小さくなり浸出水の地下浸透を極めて小さくし、遮水工の補完機能を有します。

3

本構造は、これらの特性を活かして、①埋立地基礎地盤への浸出水の浸透を防止するとともに、②埋立層内の発酵熱によって、自然に集排水管から埋立地内部へ空気を流入させることによって、廃棄物の好気性分解を促進し、集水する段階でできる限り浸出水を浄化しようとするものです。

管末は常時
大気に解放

空気

浸出水

浸出水調整池

処理施設

覆土

ごみ

CO₂

ガス抜き管

好気性バクテリアによる分解
発酵熱 50~70°C

浸出水

O₂

有孔集排水管

※酸素が足りている状態では、廃棄物はメタンガス(CH₄)ではなく二酸化炭素(CO₂)に分解される。

栗石(5~15cm)

浸出水集排水管

浸出水

しゃ水工

空気の流通ゾーン

浸出水の流下ゾーン

基礎地盤

廃棄物の分解

発酵熱

埋立地内外温度差

空気の流入

4

浸出水集排水管の末端が常に大気に開放されていれば、埋立地内の微生物の発酵熱によって外気が集排水管を通じて埋立地内に自然流入します。この熱対流現象により、埋立層内が好氣的に維持でき、その結果、廃棄物の分解速度が速くなり、浸出水の水質も良質化します。

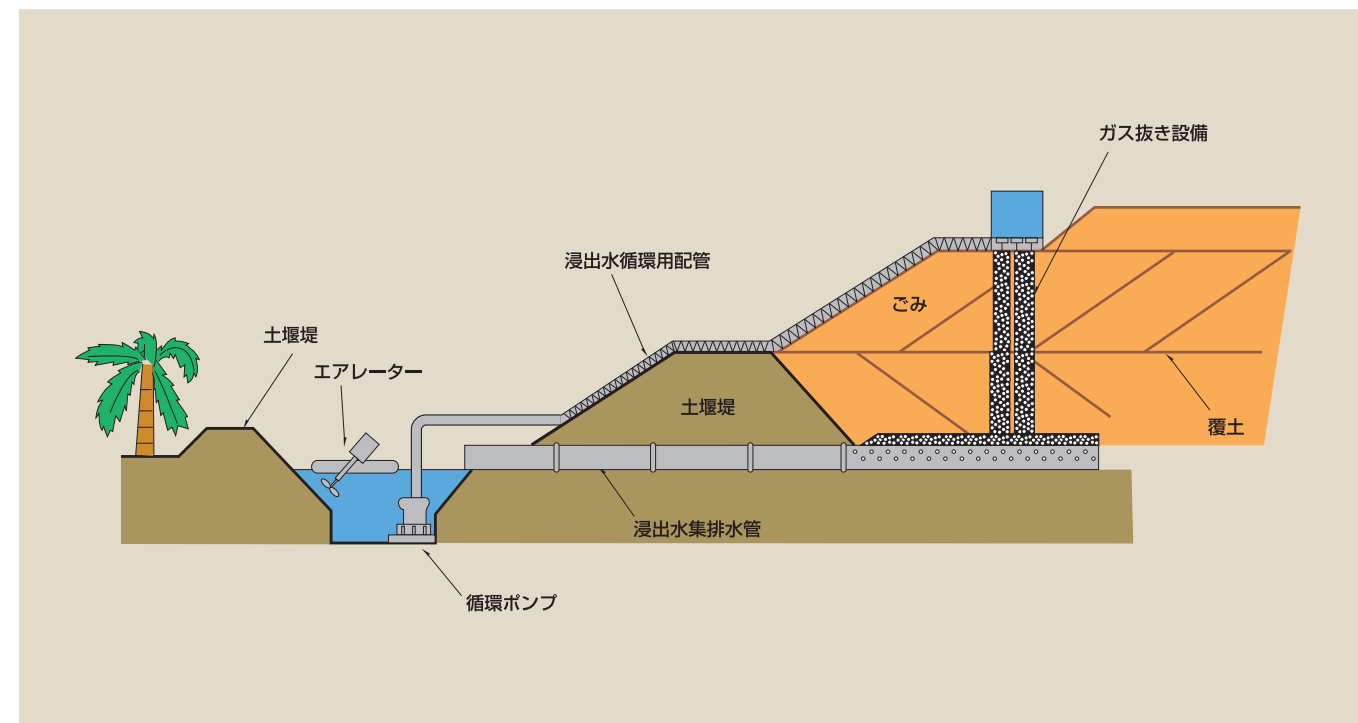
Ⅱ.循環式準好気性埋立

循環式準好気性埋立とは、集水した浸出水を埋立地に返送することによって、廃棄物層が本来有する浄化能力を最大限に利用して埋立地内部で浸出水を浄化し、同時に埋立廃棄物を早期に安定化させようとするものです。

本構造の特徴は、浸出水を循環させることにより、①微生物の集積が計られ、微生物の活性が高められることにより、埋立地の早期安定化に寄与すること、②硝化・脱窒反応が促進され、有機成分と同時に窒素成分がよく除去されること、そして③浸出水量の変動を抑制したり削減が可能になることです。

本構造は、準好気性埋立地の機能を拡大発展させ、さらに埋立地に制御機能を持たせるために開発されました。特に、浸出水中の汚濁物濃度の高い発展途上国において普及が期待されます。

図ー4 循環式準好気性埋立システム



Ⅲ.浸出水処理

家庭から排出される生ごみなどの有機性ごみを埋立処分すると発生する浸出水は、極めて高濃度の汚水となることがあります。嫌気的な埋立では、浸出水のBOD濃度やCOD濃度で数千～数万ppmのオーダーになることもあります。このような高濃度の浸出水を処理施設で処理し、一定の基準値以下にするには多大な費用と時間がかかります。したがって、まず、埋立地を準好気性埋立構造にし、埋立地の浄化機能を活用して浸出水の浄化を図ることが必要です。

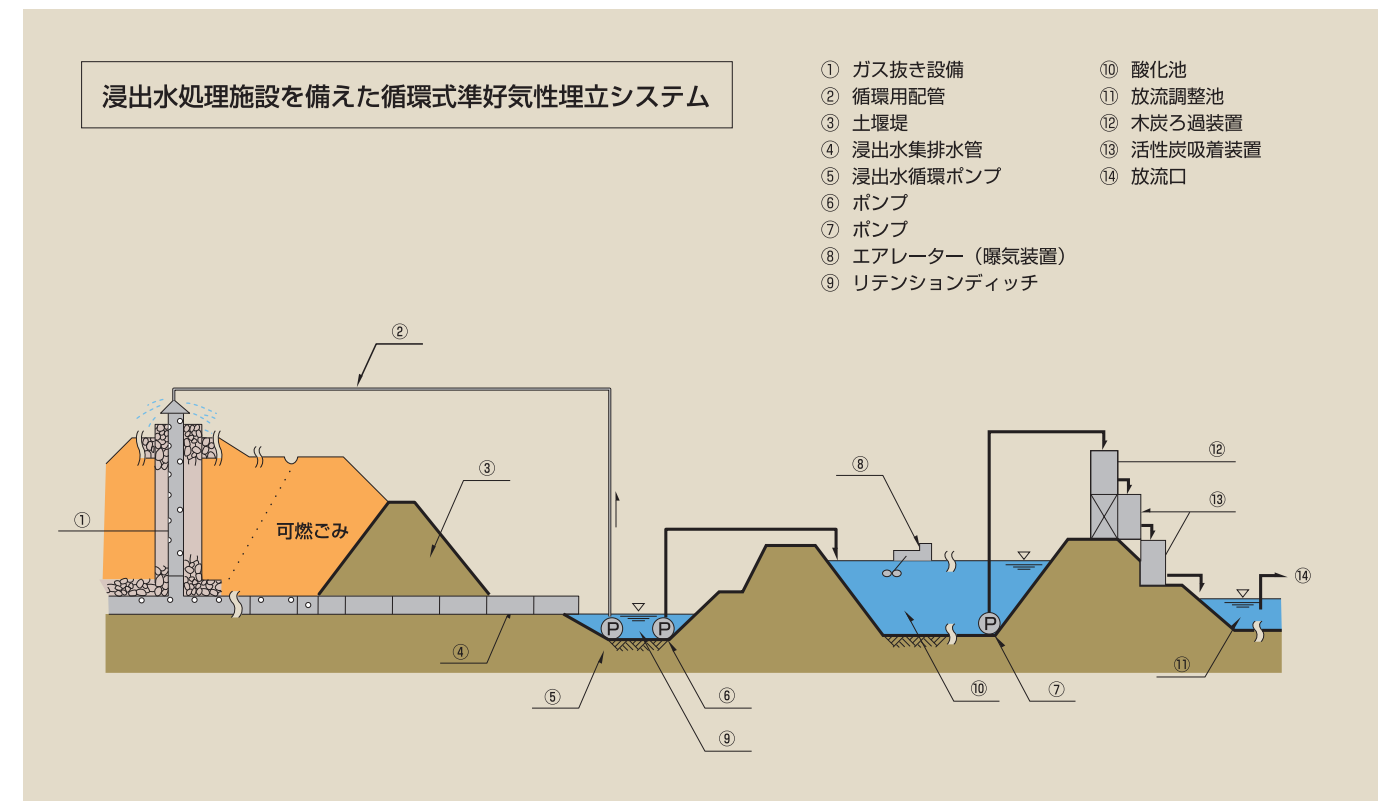
埋立地を循環式準好気性埋立構造とすることにより、さらに浸出水の浄化を促進させることも検討する必要があります。

浸出水の処理は生物処理と凝集沈殿の組み合わせが有効です。生物処理においては、窒素分を除去することも可能です。凝集沈殿処理では凝集剤を添加し、弱酸性領域 (pH=6.5程度) で処理すると効率的にCOD成分が除去できます。

本格的な浸出水処理施設を建設するまでの暫定的な処理としては、浸出水を埋立場に循環した上で、リテンションディッチでの曝気 (エアレーション) や簡易的な凝集沈殿及びろ過吸着処理の組合せが効果的です。

ここで、マレーシア国スプランプライ市アンパンジャジャル埋立場で採用された処理フローを紹介します。スプランプライ市では、浸出水を埋立地に循環し、酸化池でエアレーションした後、以前は埋立処分されていた活性炭による吸着処理を行っています。この活性炭は商品価値のない廃活性炭が埋立処分されていたものを有効活用したものです。

図ー5 アンパンジャジャル埋立場（マレーシア国）浸出水処理フロー



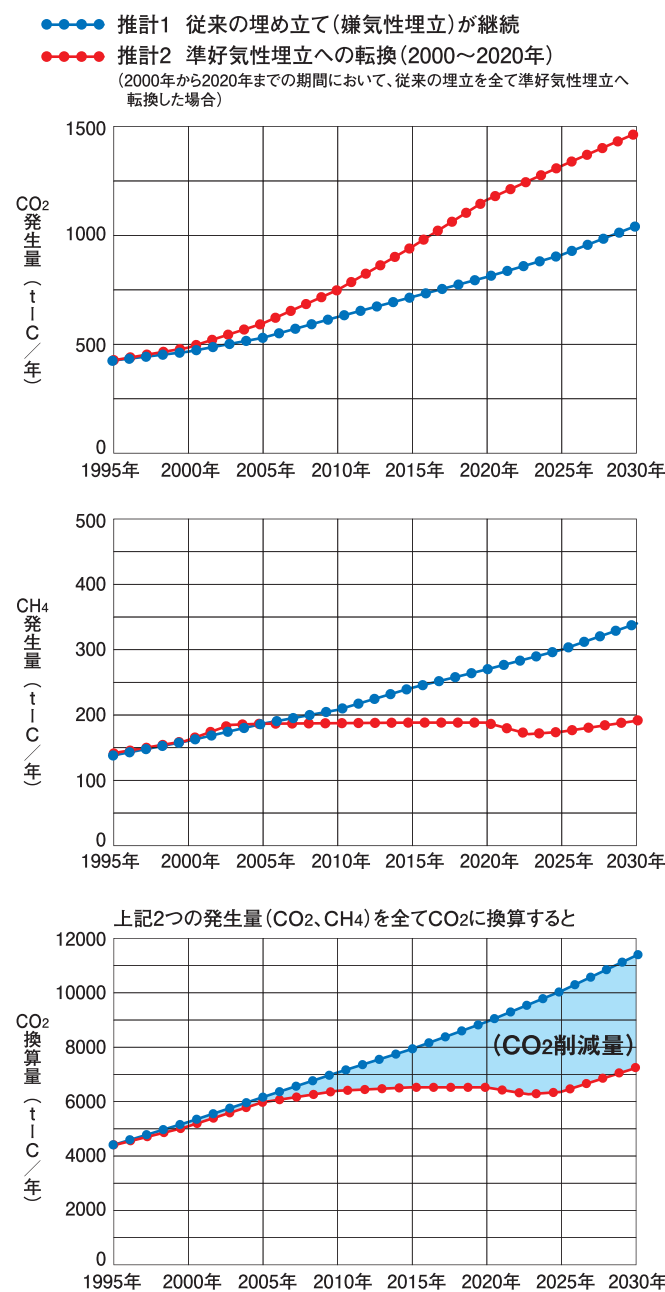
Ⅳ. 温室効果ガス抑制効果

可燃ごみを使った実験から「福岡方式」によるごみ埋立は嫌気性ごみ埋立に比べて温室効果ガスを50%以上削減できることがわかっています。

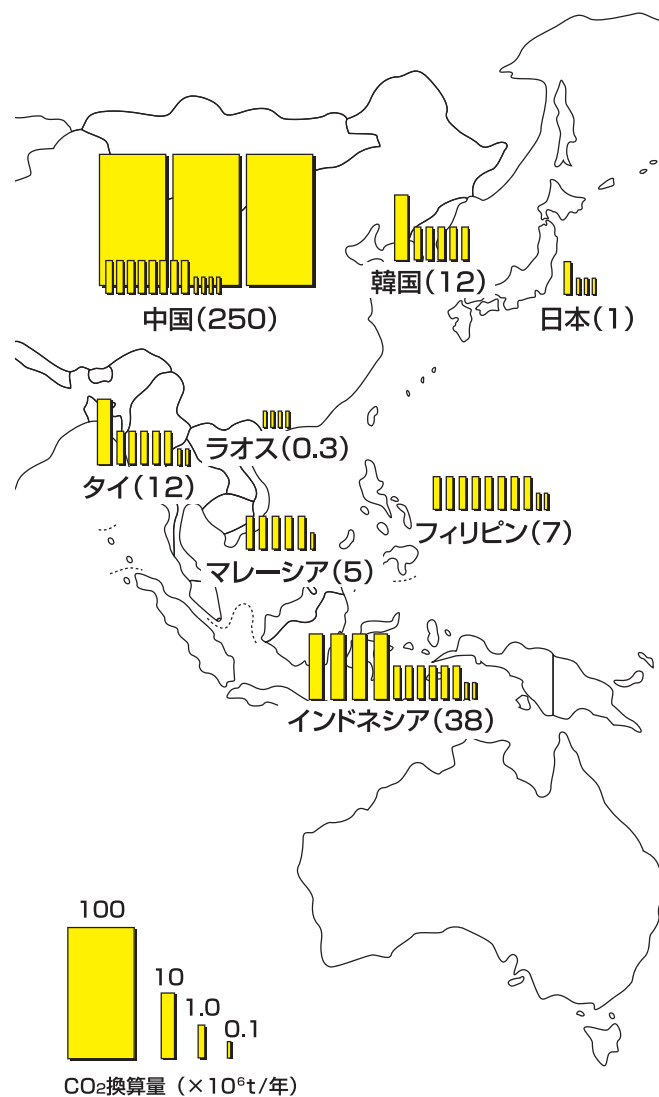
「福岡方式」（準好気性埋立）は嫌気性埋立に比べて酸素が供給されるために有機物の好気性分解が促進されます。供給された酸素は、ごみ固形中の炭素（C）と結合し、炭酸ガス（CO₂）を生成し、埋立場上面から出ていきます。嫌気性埋立は酸素が供給されないため、埋立初期にごみと共に混入した酸素が消費されると、嫌気的なメタン発酵期に移行し、メタンガス（CH₄）と炭酸ガスが発生します。

温暖化への影響が大きいメタンガスの発生が抑制されることと、分解の促進によってガス発生の期間が短くなることにより「福岡方式」は嫌気性埋立に比べて温室効果ガスの発生を削減することが可能です。

◎埋立地からの温室効果ガス発生量の削減効果（マレーシア国の場合）



◎アジア諸国における埋立場からのCO₂、CH₄発生量（2004年）（CO₂換算量）



（ ）内は日本のCO₂換算量を1とした場合の各国の比率

出典：上記2つとも「福岡大学 修士論文 小林栄己」

Ⅴ. 国際協力機構（JICA）との連携

福岡市は国際協力機構（JICA）と連携して、廃棄物埋立技術のアジア太平洋諸都市への技術移転を進め、廃棄物最終処分場に起因する環境汚染の軽減やメタンガス削減の取り組みに協力しています。

その取り組みの一つとして、JICAからの要請により、平成17年度から平成20年度にかけて「パキスタン廃棄物処理対策能力向上」を実施しました。パキスタンで廃棄物処理に携わる管理監督者及び実務者を受入対象とし、福岡大学と福岡市の技術者が、埋立地の適切な選定、「福岡方式」による埋立地の建設技術、埋立地の運営管理・環境管理、埋立地の安全な閉鎖技術、埋立地の改善方法等について、事例視察や実技研修を交えながら約1ヶ月間指導を行いました。また、廃棄物の収集運搬や循環型社会の構築等についても研修を行っています。途上国の埋立技術の指導のため福岡市の職員の派遣も行っており、これまで11ヶ国、75名の技術者を派遣しています。また、国内研修の拠点として海外からの見学者は70ヶ国以上、約4,000名が埋立場を見学しています。



埋立場での職員による福岡方式の講義



廃タイヤを利用した堅型ガス抜き施設の施工実習（2008年）



竹を利用した浸出水の集排水管の施工実習



廃タイヤを利用した浸出水集排水管の施工実習



ガス抜き管からの発生ガスの測定実習（2012年）



埋立機械の点検実習